Oさんの語り（大島青松園）

大島に来たのは18か19歳で、まあ若かったし、ほんまに子ども心で。一つ言えば、わしの親父がもう年がなんぼくらいやったかな、63、65歳ぐらいやったと思う。昭和22年頃やったと思うんじゃけど、その頃は戦争も終わって、やっとこれから日本も良うなるんかなーという時期やった。中学3年を卒業して、もう学校も卒業したし、これから何をしようかなと思っていた時期やった。四国の山の中におって、川に行って魚も捕ったりして遊んだ記憶が浮かんでくる。私が一番残念なのは、県の予防課におったA先生が診察して、「僕が診た限りではO君はハンセン病になっとるけん、香川県にハンセン病の療養所があるので、早くそこに行って早く治療してもらったらどうだろうか」って言われたことや。A先生という人は、後から聞いた話では、最初、大島青松園におって、それから県庁に来た先生らしくて、らい患者のことをよく診察してくれて、患者の実家にも行って面倒をみたり、直に話をしてくれたりする先生やったそうじゃ。俺もハンセン病という病気のことを詳しく知らんので、A先生に「先生、これから先どうしたらいんだろうか」って話もしたら、「それはO君、1日も早く行って、今は昔と違っていい薬もあるし、できれば早く行ってくれよ」っちゅう話を山の中でしてくれたことを昨日のことのように思い出すのう。こんな話をしてからもう半世紀以上が過ぎてしもうた。ほいで、「何でわしはこんな病気にかかったんだろうか」っちゅう話を、わしの親父としたんじゃ。あれは何処ゆうたかの。何とかいう大きな山の向こうからまだ小さかったわしの面倒をみてもらうために、向こうも生活に困っとるけん、ねえねえ（＝子守り）に来てもらっとったようじゃ。どうもその人がらい病だったようなんじゃ。わしはおやじに「おやじは何で自分のところにその子を呼んで世話をしてやったんか。おやじが馬鹿みたいにそんなことをせんかったら、わしが病気になることも無かったじゃろうに」言うて話したことがある。わしはどうしてもこの病気になったことが頭から離れんけんのう。今でも時々そのことを思い出して考えるときがある。

親父は癩なんかいう病気はそんなに人に伝染る難しい病気じゃねえと思っとったみたいなんじゃ。まだ子どもが小さいし、同じ屋根の下で生活して居れば、伝染するんじゃないかっちゅうようなことは、あんまりおやじは深々と考えたことも無かったようなんじゃ。「おやじはお人好しの貧乏じゃあ。どうしてもうちょっと深う考えてくれんかったんならあ（＝考えてくれなかったのか）」と思って、夕食を食べながらその話をすると口げんかになりよった。

園に来てからいうたら、長くなるけんど、俺、半年かそこらは、毎日西の浜に行って高松の街ばっかり見つめておった。そうしとったら、他の連中が「毎日毎日、松の根っこみたいなところに座って何をしよんや」って言う、「おら、何ちゃしよらん」。まあ、そんな日が6ヶ月くらい続いたのう。最初はもう「高松の港に上がったら、もう歩いてでも帰ぬ」、そう思いよった。そうこうしよる間にだんだん日にちが経ってくると気持ちが和らいで。知り合いもできてきたし、あんまり今までのように西の浜に行かんようになってきた。ほんで部屋に帰って、みんなと一緒に飯を食ったりする。まあ、あの当時はまだ此処が麦飯を食わしよったわ。それでも「これはもう、行きつくところまで行きついたのう」思うて、みんなと一緒に麦飯を食べながらそう思いよった。

それからそういう時期がだんだん過ぎて、年も20か21歳くらいになってきたし、みんなと一緒に「いっぱい飲まんか」言うて、飲み友達も増えてきて、ほんで、みんなとやいやい言いながら、酒飲んで。酒飲んで喧嘩する者もおったしのう。まあ、ここへ来てから半世紀以上の年月が経つんやのう。それからだんだん年取ってきて。

毎日、毎日もう真っ黒になって、海に行って潜って、タコを捕ったり、サザエを捕ったりして過ごしたことを今だに思い出すのう。あの頃は若い者が沢山おったし、タコとかサザエとかをつまみながら酒飲んでいろいろな話をしよった。みんなが寄ってきたら、「おお、食べんか、食べんか」言うてバケツに1杯も2杯も焼いて食う。日本酒飲んだり、焼酎飲んだり、もう、わや（＝無茶苦茶）や。そんなことしよりゃ、酒買う銭が無くなったもんじゃけえ、「おやじ、おらもう何ちゃ買う銭がないけん、酒代でも送ってくれや」言うて飲んだ。ほんで、毎日毎日酒ばっかし飲みよったら、「もう長生きはせやせんぞ。飲むなとは言わんけんど、もうちっとほどほどに飲まな駄目」いうて親父に怒られたことを覚えとる。若いけん、毎日あの頃は若い者が沢山おって、いつも面白かったのう。他のことは、えらい目ばっかりして面白いことなんか一つもなかったけんどのう。大島に来てからは、酒飲んだり食うたりしたことが一番の思い出やのう。他には何ちゃ無い（＝何もない）。

わしは此処に来て、色々なことがあったけんども、人間は何処に行っても苦労はある。大島に来てから、独りで住んで居るのは、まあ呑気といえば呑気。「何ちゃあ心配事が無かろうが」言われたこともある。今考えてることは、やっぱり、人間は健康でなかったら駄目。健康であったら何でも自分で出来るし、人の手を煩わすことはない。健康というのは素晴らしいと思うのう。今思い起こすと、若い頃、30歳頃が一番楽しかったな。34～35歳あたりになってくると、人間に欲が出て、「外へ行って、親が生きとるうちに何か仕事でもしようか」いうような気持ちになった。やっぱり若さがないと駄目な。年取ったら、若さがあったら何でもやろうと思って自分から希望持っておれるけんど、だんだん年を取るにしたがって「あれしよう、これしよう」いうような希望がだんだん無しになってくる。お互いに此処に居る患者さんたちはみんなそうだろうけんど。「俺はなして（＝どうして）此処に来て、くよくよくだらんこと考えて、どうして此処に住んでおらな駄目だろうか」と考える。親父もそうこうしよるうちに年取ってきたし、甥らはだんだん大きくなって働けるようになったけん、それは心配せんでもよくなってきたけんど。一番駄目のは、わしらの住んどった家がだんだん古うなって来とった。そうやけん、親父が元気なうちに、家を1軒建ててやろうかと思った。まあ2～3年もあればできるだろうと思うてのう。Tという親方にその話をしたら、「帰ってくるんなら、2年でも良いけん帰ってきて家のことしてやれや」言うてくれて。「するにしても、銭が無かったら出来へんが」いうたら「あんじょう（＝良い具合に）貸してやるけん、どうにかなるわ」言うてくれて。そうこう考えとるうちに親父が死んでしもうた。親父は80歳過ぎで死んだがよ。「そうか、おれの親父はずっと一人身やったけど、いろいろなことを考えてやってきたんだろうなあ」と、そんなことを思いよったら、「よし、親父は80何歳で死んだが、俺は頑張ってハンセン病という病気であっても頑張って生きようかな。誰でもそうやけど、人間は死んでしもうたら何ちゃにならん。

そこらに転がっとる石ころと一緒になるわ」と思うて考え直して生きることにしたがよ。

年取って50歳に近うなってきたら、「実家に帰っても大したことは出来ん」思うて、防波堤で独りでいろいろなこと考えて、諦めた。

特に良いことも無かったけんど、これと言うて悪いこともなかった。今日まで生きておって、こんなことがわしの最後のちっぽけな喜びであるかもしれんな。若かったら（故郷に）帰りたいわ。まだ30歳ぐらいだったら帰りたい。

「大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り（2015年12月15日発行）より、一部抜粋して掲載

Kさんの語り（大島青松園）

10歳頃までは何不自由なく暮らしていたことは覚えているね。どうも小さい頃は可愛かったみたいで「ちょっとこの子貸してくれ」言うて奪い合うようにして子守りしてもらいよったげな。自分の一番良い思い出は11歳までやと思う。子どもの時が一番、幸せだった。発病当初は「何が何でも治さんと駄目」と思ったんよ。で、大風子（=大風子油）を自分で買うてね、打ちよったんよ。素人が注射するんじゃけん、化膿してばっかり。2、3回してやめた。今も痕が残っとる。ほんでね、この病気やったら○○教がいいとか、四国遍路がいいとか石鎚さん（=日本七霊山の一つ霊峰石鎚山）に参ったらいいとか、お猿の頭を煎じて飲んだら治るとか、いろんなこと言うてくれる人が居るわ、親切か何かしらんけど。○○教は家から一里もない所にあるけん、だいぶ続けて行ったで。「このノートに書いとることを暗記したら良い」って言われて、行き帰りに暗記した。治ると信じてね。半年くらい通ったら、「近畿の本部へ行ってくれ」って言い出したんよ。それで、おかんが「もう此処では駄目、行っても無理や」って言い出したんよ。ほんでもう、「それなら療養所に行くわ」言うたんよ。ここに居っても金ばっかりいるんで。裕福な家でもないしね、うちは。それで大島に来たんやけど、一番最初は「高松は綺麗な街やなあ」と思った。ほんで「大島もきれいな島やろうなあ」って思って入ってきたら中はひどいもんやったなあ。当時は部屋に入ったら畳は真っ黒で、じと〜っと湿っけた感じ。畳の縁のない柔道の畳みたいなやつなんよ。ほいで汚かったで。朝、布団あげたら、みんなで「1、2の3」で箒で掃くんよ。箒で掃いたら真っ白い埃で敵わんかった（=耐えがたかった）。「こんな所に居れん、帰る。」言うたぜよ、母に。けど、帰るいうても、そういうわけにも駄目し。それは辛かったけどね。

ここへ来たときは茫然自失っていうのかなあ、何も考えられんかった。とにかく帰りたいんよ。「こんなとこで死んでたまるか」いう気持ちやったけんどよ。気持ちはあっても病気が騒いでいくきにね（=病勢がひどくなる）。諦めるしかなかった。最初は3ヶ月は無理でも、3年したら帰れるやろって思うとったんよ。だけど、子どもなりに辺りを見よったら、全然帰る人が居らんのよ、帰れる人がね。みんな自然と体が悪くなっていくんよね。「みんなこんな悪い状態になって何時まで命があるのかな」って思いよったよ、子ども心にな。ほんで、納骨堂があるやろ、火葬場もあるしな。療養所っていいながら納骨堂もちゃんと備えてる。あれ見た時、「もう灰になるまで帰れんのかな」と思ったね。少年舎に来た時ね、男女あわせて14〜15人おったと思うよ。みんな勉強するんよ。偉いなあと思った。今さら勉強したって、何になるかと思ったけど、やる人は勉強しとった、一生懸命ね。

中学校を卒業したら一般寮に下がらな駄目くなるんよ（=一般寮に移動することを「下がる」という）。下がった部屋がまた汚いんよ。24畳で15〜16人居ったかね。若い時は腹立ったでよ。「これが療養所か、これは収容所じゃないか」と思って。子どもの時はそんなんは思わんよ。20歳過ぎると仕事ばっかりやろ。それも強制的やろ。治療するところや思って来とるのに、これじゃ療養じゃない、収容所やと思った。傷があるのに仕事せんと駄目から、傷が悪化して切断せんと手に負えんようになって、指がどんどん短くなるしよ。昔はね、1〜6病棟まであったんよ。6病棟が一番重症で、ひどくなるとそこに送られるんよ。6病棟にはみんな（患者作業に）行きたがらんのやけど、順番に行かなきゃならんのよ。病棟看護に行っとったら食事どころじゃないけん。15日間、ぶっ通しで行くんよね。15日で1ヶ月分の賃金くれるけど、元気な者には強制的にまわってくるんよね。（患者作業のうちで）一番きついのは病棟看護やなあ。昔の看護婦さんは冷たかったで。平均的に冷たかったね。ものが言いにくかった。医者も患者区域には入って来んもん。入ってきても、帽子にマスクして、目だけ出して、予防着を着て、長靴まで履いて。家の中に土足で上がってきた時代やもんね。土足か、土足じゃない時はつま先歩き。汚い所を歩かんでもすむように。こっちは新聞敷いて待っちょる。

僕らが入ってきた昭和23、24、25年頃は棺桶が1日に2つも3つも並んどった、厳しい時やけん、食事も悪いしね。弔って悲しいとか、そんなんは全然なかった。中には悲しんでいる人もおったと思うけど。「こうやって死んで火葬して納骨堂に入る、それも有りかな」と思いよった、深く考えんと。ほんで僕らも若かったしね、湯灌もした。部屋に順番にまわって来るのよ。「今日は何寮の○○さんが亡くなったき、同じ寮の者が行ってくれ」って。僕らも相当、湯灌したでよ。30体以上したかな。今はきれいに化粧までしてくれるけどね。もう、石ころみないなもんよ。あっちこっち棒擦り（=デッキブラシ）で擦るんよ。洗う言うても手で洗うんやない、棒擦りよ。物よ、死体いうたら。ホースかバケツで水をジャンジャンぶっかけて、擦るんよ。「もし自分が亡くなったら同じことされる」とか、それは全然思わん。あの頃の自分はバチが当たるようなことはせんけどよ、まあいい